

# 石高神社報

## 第九号

発行日 平成三年十二月十五日  
発行者 石高神社 宮司 高原 章兆  
発行所 岡山市円山八五三 石高神社

### 古文献にみる石高神社

神名帳等によると、千年ほど昔、備前国には百二十八の神社がありました。現存する備前国の神名帳で一番古いのは「備前国神名帳」（綿抜本または総社本）で貞観五年（八六三年）頃のもですが「石高同神社」と載っています。しかし、石高神社は平安時代の諸制度を編纂した「延喜式」の神名帳（九二七年）には載っておらず、式外古社のひとつと言われています。また、現存する他の神名帳には次のように載っています。

○国内神名位階記（山本本、八日市本、応永（一三九四～一四二八年）の写本） 天慶頃（九三八～九四七年）

#### 正三位 石高明神

○神名帳（西大寺本、明応四年（一四九五年）の写本） 天慶頃（九三八～九四七年）

#### 正三位 石高明神

○備前国神名帳（神上金剛寺本、弘安八年（一二八五年）の写本） 建治元年頃（一二七五年）

#### 正三位 石高大明神

このように昔の社名は「石高」神社でしたが、江戸時代に「八幡宮」に変わります。社伝によりますと、今の宮山から北手にあたる高倉山の山頂に大己貴命を祀る石高神社があり、西の方の岩坪（円山の枝村、現在の嶽の岩坪と思われる）に須勢理姫命を祀る八幡宮がありました。天和三年（一六八三年）に両社を現在の宮山に移して合祀し、岩壺八幡宮と称していましたが、明治四年に旧号の石高神社にもどし、幡多郷の総鎮守と定められました。このため、江戸時代の書物には次のように八幡宮として載っています。

・備陽国志 上道郡神祠の項に「八幡宮 円山村 創造時代不詳」

・吉備温故秘録 村落（上道郡）円山の記述の中に「八幡宮」

・同 神社の項に「八幡宮 円山村 高原氏」末社稻荷」

・備陽記 「八幡宮 円山村之内ニアリ末社稻荷」

・撮要録 「円山村 八幡宮 社司御野郡七日市村高原氏末社稻荷」

## 修理計画

平成三年には裏門への排水工事を行い、費用は祭典費（供進金）の通常会計から出しました。これにより、大雨時の排水が多少なりともうまくいくようになり、懸案になっていた民家への心配も減りました。

石高神社にはまだまだ危険な箇所や老朽化した所がありますが、秋の総代会の折に皆で境内を見回り、緊急に修理する箇所を決定しました。まず第一に、傾いてきている表門西側の燈籠を元に戻すこと。第二に、表参道の石段の東側の石の手すりが歪んできているので応急的に補強工事すること。以上二箇所は危険を伴う所ですので、できるだけ早急に工事にとりかかるように計画しています。次に末社稲荷の屋根の修理です。稲荷神社は末社では一番大きく由緒ある社です。今修理しておかなければ社務所と同様に取り返しのつかないことになりそうです。また、隨身門の東側正面の一部修理、および台風で壊れた末社二社の新調も必要です。

以上のように修理を計画していますので、その説はよろしくお願い申し上げます。

## 末社紹介 ⑧

境内には社が無くて賽銭箱だけがある所が五箇所あります。社殿の北側には石高神社を本殿の裏から拝むようになっています。また天御中主神（あめのみなかぬしのかみ）を

北に向いて拝む所があります。天御中主神は古事記の最初に「天地初発の時、高天原に成りませる神の名は天御中主神」と述べられている神様です。この神は北辰（ほくしん）の思想と一致して北極星や北斗七星を神格化した妙見信仰を生みました。東側には伊勢神宮、南側には沖田神社の境内社の道通宮、西側には嶽の山の上にあります王子山神社（王子宮）の遥拝所があり、鎮座しているそれぞれの社の方角に向いて離れた所からも拝めるようになっていきます。

## 正月行事のご案内

お正月には氏神様の石高神社にお参りになられますようご案内申し上げます。当神社では元旦の午前〇時から新年の祝詞奏上の後、午前一時前まで新年のご祈禱を行います。正月三が日の昼間は新年祈禱、厄祓え、学業成就祈願等の各種祈願を行います。ご希望の方は拝殿にお上がりください。



一月十五日は午前十時ごろから、とんど祭および古札焼却祭の祝詞奏上の後、正月のお飾りと古い御神札を焼きまします。二月一日は厄除祭の日です。厄祓えを受けられる方はこの日に限らず、一月の日曜祭日の午前中にお参りください。